

## 「研究動向」欄の新設について

本誌（『東京大学宗教学年報』）は、1984年の創刊以来、「書評」欄を設け、国内外の宗教学の近刊書を取りあげてきた。第5号前後から徐々に、教育的観点から、修士課程の院生が主としてこれを担当するようになった。しかし、30年が経過するうちに、宗教学の新刊を紹介・書評する機関誌の類が他にも現れ、また、インターネットの発達により、新刊情報の入手が飛躍的に容易になった。本誌のオンライン公開も始まり、従来より広い読者を意識した内容が自然と求められるようになり、評する書籍の選択の適切性が研究室内でしばしば議論されるようになった。

編集委員会はこのような状況の変化を鑑み、数人が1冊ずつ書評を担当するよりも、自身の専門分野の研究動向をある程度まとめてサーヴェイ（概説）する方が、学界への貢献度も増し、担当する院生の研究水準を上げるという点でも効果が高いと考え、本号（第32号）より、「書評」欄を「研究動向」欄に変更した。この欄は引き続き修士課程の院生が主に担当し、それぞれの先行研究にあたる領域について、専門を同じくする研究者のみならず、異にする読者の関心も喚起するような形で、どのような研究がなされているのかを、歴史的経緯を含めて俯瞰することを目指している。本号では2本のサーヴェイ論文を収録した。

さらにその後に掲載した8本の論文は、博士課程の院生が、1973年刊行の『宗教学辞典』（小口偉一・堀一郎監修、東京大学出版会）のいくつかの項目に対する追補（*further considerations*）として書いたものである。すなわち、それぞれの項目について、1970年代以降にどのような研究の展開があったかを調べ、論評した内容である。これらの執筆にあたっては、まず、大学院の演習授業（「現代宗教学の諸問題」藤原担当）において、旧項目の記事を十分に理解することから始めた。そしてその後の研究動向をまとめるにあたっては、2010年刊行の『宗教学事典』（丸善株式会社）の類似項目も参照しつつ、どのような情報や視点が、独自でかつ意義のあるものになるかを検討した。すべての草稿に対しては、教員・受講者全員で議論を行い、担当者はそれを受けて推敲を重ねた。なお、いずれも、旧項目の後に付けること、言い換えれば、読者は旧項目に目を通していることを前提に書かれている（理想的には、旧項目を併記する方が読者の便宜を図ることができるが、著作権のため、それは実現できなかった）。

次号以降は、修士課程の院生によるサーヴェイ論文を継続するとともに、『宗教学辞典』諸項目の更新記事も数号後に再び企画する予定である。

（文責 藤原聖子）